

学位論文要旨

氏名 山田 泰史



論文題目

Noninferior oncological outcomes in adults aged 80 years or older compared with younger patients who underwent radical nephroureterectomy for Upper tract urothelial carcinoma

(上部尿路上皮癌に対して根治的腎尿管摘除術を行った80歳以上の高齢者と若年者の比較における非劣勢腫瘍学的転帰の検討)

指導教授承認印

山田 正嗣



Noninferior oncological outcomes in adults aged 80 years or older compared
With younger patients who underwent radical nephroureterectomy for
Upper tract urothelial carcinoma
(上部尿路上皮癌に対して根治的腎尿管摘除術を行った 80 歳以上の高齢者と若年者の
比較における非劣勢腫瘍学的転帰の検討)

氏名 山田泰史

(以下要旨本文)

世界的に高齢化社会が進行しており、癌患者の数も世界的に増加し続けると予想されている。高齢癌患者の治療方針は若年患者と異なる場合があり、特に手術に関してはこれらの方針の議論が行われる。根治的腎尿管切除術(RNU)は上部尿路上皮癌(UTUC)の治療としてゴールドスタンダードの治療法だが、高齢患者に対するこの手術の有用性についてはほとんど検討されていない。80歳以上の患者のRNU後の予後については、依然として議論の余地がある。我々はUTUCに対してRNUを受けた80歳以上の患者における腫瘍学的転帰を若年者群と比較し検討した。

1990年1月から2015年12月までに、北里大学付属病院6施設(神奈川県)で計451人のUTUC患者がRNUを受けた患者を対象とし、術前化学療法を受けた8人の患者と手術前に転移のある2人の患者は除外された。患者は、RNU時の年齢に応じて、64歳以下(n=135)、65~79歳(n=254)、80歳以上(n=52)の3つのグループに分類した。無再発生存期間(RFS)、がん特異的生存期間(CSS)、および全生存期間(OS)はカプランマイヤー法を用いて推定しログランク検定を使用してグループ間で比較した。また生存曲線に対する組織学的要因の影響を調べるために、COXハザードモデルを使用して短変量回帰分析及び多変量回帰分析によって検討した。

RFSとCSSには3つのグループ間で有意な差はなかったが、OSは80歳以上の患者で有意に低かった。またpTステージ(<pT1、≥pT2、および≥pT3)に層別化した場合も同じ結果が得られた。OSの多変量解析では80歳以上の年齢が有意な独立危険因子だった(ハザード比: 3.01、p=0.01)が、RFSとCSSには有意差はなかった。

UTUCのRNUを受けた80歳以上の患者では、より若い患者と比較して、腫瘍学的転帰は同等の抗腫瘍効果を示した。我々の研究は、根治手術に耐えられる高齢患者にとって外科的治療が有益な選択肢であることを示唆していると考えられる。しかしながら我々の研究は少数の患者を対象

とした後ろ向きの研究であり、また周術期の詳細な合併症や80歳以上の高齢群の腫瘍関連治療以外の治療を受けた際の罹患率や生活の質の評価などの細かいデータが不足している。今回我々の検討にはロボット手術を受けた患者は含まれていなかったが、近年ロボット手術は腹腔鏡手術に比べて腫瘍学転帰は同等であり、合併症率等は低いといわれている。様々な低侵襲手術の出現により患者の身体的負担が軽減され、80歳以上の患者の手術の選択肢はさらに増加すると考えられる。今後、患者数や細かなデータを増やしてさらなる検討が必要と思われる。